イデアの自己述定と mass term の意味論

Self-Predication of Forms and Semantics of Mass Terms

栗林 広明

1　SP 文の意味

プラトン研究はこれまでに、彼が‘The beautiful is beautiful’、‘The just is just’などの文の真理性にコミットすることを明らかにした。ただしこれらの文がどのような言明を行うためのものなのか、あるいはこれらの文がどのような意味なのかという点になると、まだ答えは明らかになっていない。これらの文はイデアについて語っており、当初は、イデアの自己述定(self-predication)を言明するためのものと解されたが、それに対していくつかの代案も提示されてきた。このように、上のような文（以下、「SP 文」）にどのような意味論を与えるべきかということが プラトン研究の一つの課題として残されている。本稿では『パイドン』という限られたテクストの範囲ではあるがこの課題に取り組みたい。

まずこれまで提出されてきた主な解釈を振り返っておこう。一つめの解釈(1)は、SP 文は「美しさは美しい」などを意味する、あるいは、美しさという性質が美しさという性質、つまり自分自身を持つことなどを意味すると考える。この解釈を採る論者は大抵、ある性質が、持つことのできない性質を持つと主張することになるとしてプラトンに何らかの混同を帰している(2)。イデアの「自己述定」という呼称が基づいているのはこの一つめの解釈である。

上の解釈は‘The F is F’の‘is F’を、‘a is F’の‘is F’と同様に理解していた。これに対し二つめの解釈(3)は、‘is F’は equivocal であると考える。この解釈によれば 、プラトンにとって‘… is F’における‘F’は名前、しかもその第一の指示対象がイデアであるような名前であるから、SP 文は‘The F is the F’と同じことを意味する、つまり同一性を表す。また、個物についての文は、a が派生的に‘F’という名前を持つことを意味するが、あるいは、むし

ろ a が F のイデアとある関係に立つことを意味する。こうして‘is F’は体系的に equivocal であるとされる。なお、この解釈はその主張をもっともなものとするために、個物とイデアの関係を１ポンドの事物とポンド原器の関係に準える。そして、「…は１ポンドの重さがある」は、ポンド原器について言われるときと諸々の事物について言われるときとで意味が異なるとする。この二つめの解釈はイデアを性質とみなすことに反対する。

三つめの解釈[4]は、‘The just is just’などの文は通常の述定であり、しかも真であると考える。つまり述語「正しい」は正しさをその外延の中に持つとする。そして、そうであるためには「正しい」の外延としてどのようなものが認められなくてはならないかを考察する（外延の再発見）。まず、ある範囲の、人々、法律、制度などについて、そしてそれらについてのみ真となる述語を「正しい $_1$」としよう。そして「どのようなｙも、もしそれを分有するならそのｙが正しいような、そういうもの」と同じ外延を持つ述語を「正しい $_2$」とする。そうすると、この解釈によれば、「正しい」という述語は、a)「正しい $_1$」の外延と「正しい $_2$」の外延という二つの外延を持つか、あるいは b)「正しい $_1$ または正しい $_2$」と同じ外延を持つことになる。正しさや敬虔という性質は、それを分有するものがみな正しいので[5]、a)「正しい $_2$」の外延のメンバーにも、b)「正しい $_1$ または正しい $_2$」の外延のメンバーにもなっており、したがって「正しい」の外延の要素である。

2　述定、イデア

後の二つの解釈は、SP 文の真理性へのコミットメントを理にかなったものにしようとする。しかしそれらの試みはうまく行っているのだろうか。二つめの解釈（同一性解釈）から検討しよう。この解釈の要点は‘The F is F’の‘F’をイデアを名指すための名前とする ところであるが、そのように考えることができるのは、諸々の美しいものなどがイデアと「同じ名を持つもの」(homônymon)とされる箇所(*Phaedo* 78d10－e2[6])、あるいはイデアに「因んだ名」(epônymia)を持つとされる箇所(102b1－2)を、名前についての話と解するからである。しかしこれらの箇所からそうはっきりしたことを言うことはできないように思われる。たとえば前の方の箇所は‘auto to kalon’(78d3)と‘ta polla kala’の‘kalon’についてそのように言うのだが、これが名前なのかそれとも

一般名辞なのか（あるいはそもそも同じ範疇の表現なのか）、‘homônymon’だけからは決められない。同一性解釈は、こうした箇所で問題になっているのが名前であるとするための別の根拠を示さなくてはならないように思われる。

更に次の箇所を同一性解釈で読むことはできないように思われる。74d5－7は木材と auto to ison（イデア）を比較して、「(1)それらがあるものそのものと同様に等しいと我々に見えるだろうか」、「あるいは(2)それらは to ison と同じようなものであるという点で、かのものに何か及ばないだろうか、それとも(1)決してそうしたことはないだろうか」と問う。ここでは‘The equal is equal’とされ、これと‘a is equal’が比較されている。同一性解釈は(1)を、to ison が to ison と同一であるのと同様に、a が to ison と同一であるかを問うていると解し、そして(2)を、to ison と同一な to ison に対して a は to ison と同一でないという意味で「及ばない」かを問うていると解すであろう[7]。しかし(2)をこのように解すことはできない。(2)の「及ばない」には、実際は、程度を表す「何か」(ti)という副詞句がついている。このことは、イデアの‘is equal’と個物の‘is equal’についてその二つは同じ、異なる、同じ点と異なる点があるという三種類の関係を考えることができるが、(1)、(2)は一つめと三つめを選択肢として提示するということを示す。しかし、to ison との同一性で考える限り、(1)、(2)が提示するとされる選択肢は一つめと二つめでしかありえない。同一性（非同一性）は程度を許さないのである。こうして同一性解釈では読めない SP 文が存在する。私たちはむしろ、これを述定として読むべきではないだろうか。

次に、三つめの解釈（外延の再発見解釈）を見てみよう。この解釈は、SP 文を真とみなすことが理にかなっていると言うために、述語「正しい」の外延を再考する。たしかに、そうした外延が認められれば SP 文は真となる。しかし、今度はそうした外延を認めることが理にかなっているかどうかが問題になるのではないだろうか。人々、法律、制度について真となる「正しい $_1$」とイデアについて真となる「正しい $_2$」は、なぜ同じ「正しい $_n$」なのか。「正しい $_1$」の外延と「正しい $_2$」の外延という全く異なるクラスを、どうして「正しい」は二つの外延として持つことができるのか (a)。また、そのように全く異なるクラスのメンバーから成るクラスを、どうして「正しい」はその外延として持つことができるのか (b)。こうした点を更に説明しないと、外延の再発見解釈は最初の問題を別の問題に移し替えただけになってしまうのではないだろうか。

また、ここで「正しい $_2$」とされるイデアは一体どのようなものなのだろうか。この点を明らかにすることは、一つめの解釈と対比するとき特に求められる。SP 文を自己述定として批判する人は x が正しいということを x が「正しさという性質」を持つこととして説明しようとし、その上で正しいもの（x）が持つのが「正しさという性質」であるからこ の性質自身は正しいもの（x）でない（あるいは x が正しいということを x がある「クラ ス」の要素であることとして説明しようとし、そして正しいもの（x）が要素になってい るのがこの「クラス」であるからこのクラス自身は正しいもの（x）でない）と主張する 。このような人は、たとえ添字が違っていても、そもそも同じ名辞が個体と個体の持つ性質について真となることを拒否するであろう。この態度はイデアを「正しさという性質」のようなものと考える限りもっともなものであるように思う。したがって外延の再発見解釈はイデアをどのようなものとみなすとそれについて「正しい $_2$」が真となることを受け入れられるかを示さなくてはならないように思われる。

このようにして、私は SP 文は述定とみなすべきであると考える。また、SP 文が真であると認めるならば、一つめの解釈に対抗して、イデアがどのようなものであるかを明らかにしなくてはならないと考える。

3　‘red’の意味論と‘beautiful’の意味論

ここで、mass term という範疇の名辞とクワインが与えたその意味論 (8) について見てみたい。クワインは一般名辞と単称名辞の区別について論じた後で、mass term はこの両方の側面を持つと言う。つまり、[A] ‘water’ は、‘This puddle is water’ のように述語で使われると、問題の物質の各々の一部分について真となる名辞（一般名辞）として見てよく、‘Water is liquid’ のように主語で使われると、散在するその物質の全体を名指すための名辞（単称名辞）として見てよい (9)。‘red’ のような mass term の形容詞も同様である。次に彼は〈形容詞＋名詞〉という複合名辞に考察を進める。つまり、[B]それが〈形容詞＋一般名辞〉のときは、「合成の一般名辞」（その形容詞も一般名辞）として扱ってよく、それが〈形容詞＋mass term〉のときは、「合成の mass term」（その形容詞も mass term ）として扱ってよい。たとえば、‘red house’ は合成の一般名辞、したがって ‘red’ と ‘house’ が共に真となるような事物について真とな

る。‘red wine’は合成の mass term、したがって（[A]を参照）述語で用いられると一般名辞として機能し、‘red thing’と‘bit of wine’が共に真となるような各々の事物について真となり、主語で用いられると単称名辞として機能し、‘red’と‘wine’がそれぞれ指示する二つの〈散在する世界の部分〉の共通部分を名指す（赤いものの一部でもあるワインの一部）。

このようにクワインは、‘red’のような mass term は一般名辞としてある範囲の事物について真となり（諸々の「赤い$_1$」事物）、単称名辞として〈散在する、世界のある部分〉を指示する（「赤い$_2$」ものの全体）とする。彼はこのとき一般名辞としての‘red’と単称名辞としての‘red’を区別することの重要性を強調する。それは、一般名辞としての‘red’（「赤い$_1$」）が単称名辞としての‘red’（「赤い$_2$」）の指示する赤いものの一部でないようなものについても真となるからである。赤い$_1$林檎や赤い$_1$家はその表面が赤い$_2$物質の一部であるにすぎない。「赤い$_1$」と「赤い$_2$」は関係する世界の領域さえ異なるのである。

さて、私たちの通常の理解によれば「美しい」と呼ばれる個体が共通に持つのが美しさという性質であり、定義によりそのもの自体は「美しい」と呼ばれない。しかし、プラトンはソクラテスに「もし auto to kalon 以外に何か他のものが美しいとしたら、それは、 他でもなくそのものがその to kalon を分有していることの故である。そして全てのものがそのようである」(100c4－6)と語らせる。ここでもプラトンは「美しい」と呼ばれる個体が共通に(met-)持つ(echein)ものがそれ自身「美しい」と考えているようである。彼はどうしてこのように考えることができたのだろうか。上の意味論で認められた「赤い$_2$もの」が手がかりになるように思う。この林檎は「赤い$_1$」けれども、その表面も「赤い$_1$」。これは、赤い$_2$物質の一部も「赤い$_1$」ということである。このように、「赤い$_1$」は林檎や家といったようなもの以外のものについても真となる。このことは、見方を変えると、「赤い$_1$」が真となるもの（赤い$_2$物質）が存在し、それ以外のものはそうしたもので表面（表面の広い範囲）を覆われることで「赤い$_1$」が真となると言うこともできるのではないだろうか。もしそうだとすると、同様に、少女や像といったようなもの以外に「美しい$_1$」が真となるもの（美しい$_2$もの）が存在し、むしろ少女や像はこの美しい$_2$ものの一部が備わることの故に「美しい$_1$」が真となると考えることができるように思う。プラトンは諸々の美しい事物の他に、それらの分有するものも「美しい」と言う。もしこの分有されるもの（イデア）を「美しさという性質」と解

するならば、彼の言明は正しくないことになるであろう。しかし、イデアを上の「美しい$_2$もの」と解するならば、その言明は理にかなったものになるように思われる。美しい$_2$ものの存在が認められるならば、この美しい$_2$もの、あるいはその一部は「美しい$_1$」であろうし、またそれ以外のものはそれ（の一部）を分有することの故に「美しい$_1$」ことになる。

SP 文の意味は、このような解釈によって与えることができる。要点をまとめておこう。(1)‘The beautiful is beautiful’は「美しい$_2$ものが美しい$_1$」という意味である。ただし述語の‘beautiful’は「F_1」のことであるが、主語における‘beautiful’が「F_2（なもの）」であるかどうかはここでの考察だけでは決められない。‘the beautiful’は「F_1」を 含む単称名辞であるとも、また美しい$_2$ものの各々の一部分について真である一般名辞「F_{2G}」を考えることが許されるとしたら、この「F_{2G}」を含む単称名辞であるとも解しうる からである。更に、イデアは「the F (itself)」だけでなく、「something F」(cf. 65d4－5(?), 7, 74a9－10, etc.)、「F-ness」(cf. 74c1－2, 100e5, 6, 101b6, 102d6, etc.)などの表現によっても指示され、これらの表現との関連も考察しなくてはならないであろう。したがって、ここでは、イデアは美しい$_2$ものなどのことであり、プラトンは、この美しい$_2$ものの存在を認めることで与えられるような「美しい$_1$」の意味論を持っていた、ただしこの美しい$_2$ものを指示するための表現‘the F’の‘F’の用法については更に考察しなくてはならない、としておきたい。(2)美しい$_2$ものの一部分は、それぞれ諸々の美しい$_1$事物によって持たれている。ただし、美しい$_2$ものはそうした個体によって持たれているものに尽くされないのであって、言わばその本体はひとりで、それだけで存在する。(3)美しい$_2$ものの一部分は、美しい$_1$事物がそしてそれらだけが持つという点で、個体の性質とみなすことができる。これらは「複数の個体が同時に同一の性質を持つ」と言われるときの性質（普遍としての性質）と異なるが、いずれも美しい$_2$ものとして同質であり、それらを持つものを「美しく$_1$」するという同じ役割を果たすことができるのである。

4　イデアの「部分」

以上の議論に対して、イデアが部分を持つというのはおかしいのではないかという反論があるであろう。しかし、魂の不死性を証明する議論で導入される

「我々の内の大」はイデアの部分のことであるように思われる。我々の内の大は、「a)イデアの各々が何らかのものである、そして b)他のものはそれらを分取するときそれら自身に因んだ名を持つようになる」(102b1－2)という同意を受けて、「もし君がそれらがそのような事情にあると言うならば、 果たして、c)シミアスがソクラテスより大きいと語るとき、またシミアスがパイドンより小さいと語るとき、いつでも君は d)シミアスの内に両者が、つまり大と小があると言うのではないか」(b3－6)というようにして導入される。これは推論である。この推論は次のようにまとめることができるであろう[10]。

a)：変項ϕの値の範囲を定める

［推論］

b) 全ての個物xと全てのイデアϕについて、

(Participate(x、ϕ)⟷Take name(x、ϕ))

c) Take name(s、μ)　　(∧　Take name(s、σ))

d) Is in(largeness、s)　　(∧　Is in(smallness、s))

（ただし、s：シミアス、μ：大のイデア、σ：小のイデア）

この結論 d)をどう考えるべきだろうか。私たちは、むしろ、

e) Participate(s、μ)　　(∧　Participate(s、σ))

という結論を期待するはずである。したがって、もし推論が妥当であるならば（そしてそう考えなくてはならないが)、d)は e)と同じ命題を表しているとするか、あるいは d)は e)から帰結するとしなくてはならない。前者ならば、d)の largeness は大のイデア（の一部 ）のことである。また後者だとしても、大のイデア（の一部）以外のものとは考えにくい。たしかに、補われるべき隠れた前提は色々なものでありうるかもしれない。しかし、前提で言及されない項を推論の中に取り入れるような命題が、明示されずに、単に暗黙の内に想定されているとは考えにくい。しかも、この推論は、まさにその項を導入するためのものなのである。

また、恐らく上の d)がミスリーディングであるということからそれを言い直す箇所(alla gar … ara …, 102b8－d2)で、シミアスの持つ大は、彼がより大

きいことの原因とされている。プラトンは善=原因以外にはイデア=原因しか認めないのだから、この「大」はイデアとしなくてはならない。更に、大そのものと我々の内の大は、「反対の事物」と対比されるときどちらも「反対関係にある当のもの」(auto to enantion）と呼ばれるが 、この「反対関係にある当のもの」は「内在するそれらに因んだ名を、名付けられる事物が持つ」と言われる(103b8－c1)。このことは名の由来もととなるものが内在しうることを示す。名の由来もととなることができるのはイデアだけであるから、我々の内の大はイデアである。

では、シミアスに内在するのは大のイデアの全体であるのかそれともその一部分であるのか。「我々の内の大」は「滅亡する」ことがありうるとされる(102e1－2, cf.103a1)。 これは不死性証明における役割を考慮すると文字通りに解すべきである。そうすると、もしシミアスの内の大が大のイデアの全体であるとしたら、シミアスの内の大の滅亡は大のイデアの滅亡を含意してしまう。しかし、普通イデアは不滅であると考えられている(cf.79d2 and 106e1)。また、もしシミアスの内の大が大のイデアの全体であるなら、大その ものと「我々の内の大」の違いはあまり意味のないものになってしまう。しかしこの二つは、「反対関係にあるものは決して自分と反対のものにならない」(103c7－8)という論点 の確立のためには、区別されなくてはならなかったものである。これに対し、「我々の内の大」を大のイデアの各々の一部分とすれば、その一部分が消滅するとしても、そのことはイデアの消滅を意味することはない。また上の区別は、イデアに当てはまる性格がその部分についても当てはまることを確認するためのものであったと考えれば、理解することができる。こうして「我々の内の大」は大のイデアの各々の一部分とするべきである。

しかし、なお先の反論は続けるであろう。イデアは常に同一状態にあるとされ(78d1－9)、そしてそのようなものは非合成的なものとされる(78c6－7)。イデアが部分を持つというのはこのことに反するのではないか、と。たしかに、その箇所ではイデアが「非合成的」とされていると考えるべきであろう。しかしながら、「非合成的」ということから、直ちにイデアが如何なる種類の部分も持たないとすることはできないのではないだろうか。この箇所では「合成的」なものは「分解され」(「散り散りにされ」)、「非合成的」なものはそうならないとされる。このとき、「合成的」でしかし分解されないものというのは考えられない。「非合成的」なものについてそれらだけが分解されないとされているからである(78c3－4)。こうして、まず、少なくとも、「合成的」なものはす

べて「分解される」、そしてもし「非合成的」なものが必ず分解されないということも言えるとしたら、更に、「合成的」と「分解される」の外延は一致し、「非合成的」と「分解されない」の外延は一致する。では、ここで問題になっている「分解される」とはどういうことだろうか。私たちは骨や肉の分解に二種類あることに気をつけなくてはならない。つまり、1)骨や肉が複数のより小さな骨や肉に分かたれるときのそれと、2)骨や肉が火、水、空気、土などの「元素」に分かたれるときのそれである(11)。問題の「分解」はどちらだろうか。もちろん、プラトンがこの通りの事例（火、水、空気、土）を考えていたとすることはできないであろうが、しかし彼がこの箇所で問題にしている「分解」が 2)のようなそれであって、1)のそれでないことは明らかではないだろうか。彼は「分解」をそのことによってその当のものが消滅してしまうようなものとして語っており(70a3 and 5)、また彼がソクラテスに「肉体のうちのいくつかの部分、つまり骨や腱やそうしたすべてのものは、たとえ他が朽ちたとしても、言わば『不死』なのだ」(80d1－2)と言わせるとき、話題になっているのは骨や腱がもはや骨とか腱とか呼べないような構成要素に分解されることであって、決して骨がより小さな骨に分解されるとか、腱がより小さな腱に分解されるということではないからである。こうして、「合成的」なものとは、この、2)の意味での「分解」を被るもののことである。そうすると、この意味で「分解されない」ものは「非合成的」ということになる。私たちの認めた、あの「美しい $_2$もの」は、2)の意味で「分解される」 ための「部分」を持たないので、ここでの用法に従えば「非合成的」である。しかし、だからといって、こうした「非合成的」なものが 1)の意味での分解を許すような「部分」を持つことが排除されるわけではない。「非合成的」なイデア、美しい $_2$ものが、個物によって分有されるための「部分」を持つことはこの箇所と矛盾しないのである。

5　結語

私たちは、プラトンが SP 文の真理性にコミットし、しかもそのコミットメントが理にかなったものであるとしたら、SP 文の意味論としてどのようなものを彼に帰すべきかを考察してきた。その結果、イデアを美しい$_2$ものとし、そしてそうした対象の存在を認めることで与えることのできる意味論を見いだした。プラトンの持っていた意味論がそのような意味論であるということを示

すためには、なお多くのことを論じなくてはならないであろう。しかしこの解釈は上の要請を満たすことのできるものであり、一つの有力な解釈たりうると思う。また、この解釈の認める美しい$_2$ものは、倫理の客観性を確保しようとするならばという条件付きではあるけれども、真剣な考察に値する選択肢になりうると思う。ただし、同様の意味論が措定するであろう「大きい$_2$もの」、「一つである$_2$もの」といったようなものについては、そうした対象を認めることに困難を感じざるをえない（特に、大きい$_2$ものの一部、一つである$_2$ものの一部)。この問題については、SP 文は全てのイデアについて主張されるのかという問題とともに、今後、更に考察しなくてはならない。

註

(1) Vlastos [1954].

(2) Cf. Vlastos [1956] p.287. しかし、彼は後に解釈を修正する。そしてすべての SP 文が自己述定であると解することはできず、そのほとんどは「the F は、それを持 つものがすべて F であるようなものである」と解するべきだとする。ただし、いくつかの文（'The beautiful is beautiful' など）については自己述定として読むべきであり、しかしそうした文からは不適当なことは結果しないとする。cf. Vlastos[1972], Vlastos [1974].

(3) Allen [1960].

(4) Peterson [1973]. cf. also Fine [1986]p.85, Fine [1993] pp.61－64.

(5) 正確に言うと、正しさは、それを分有するものがみな正しい$_1$または正しい$_2$から、敬虔は、それを分有するものが正しい$_1$からである。cf. Peterson [1973] p.183 and note 18.

(6) テクストはバーネットの校本を用いる。また、以下書名は省略する。

(7) Cf. Gallop [1975] p.128.

(8) Quine [1960] § 20－21.

(9) ただし、こうした見解を批判する議論もある。cf. Pelletier & Schubert [1989] esp. p.358.

(10) b)は「イデア原因説」を表していると考えられる。イデア原因説は双条

件法によって定式化することができる。「→」については 105b6－c2（その中に「熱」が生じるものは熱いであろう）を、「←」については 101c6－7（一つであろうとするものは何であれ「一」を分有しなくてはならない）を参照。

(11) Cf. Aristotle, *De Partibus Animalium*, 646a12－24. ただし彼が論じているのは「分解」ではなく、逆の「合成」である。また、ここでは彼の言う第三の合成（分解）については省略してある。

文献

Allen [1960]: R.E. Allen, 'Participation and Predication in Plato's Middle Dialogues', in id. (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics* (Routledge and Kegan Paul 1965), pp.43－60.

Fine [1986]: G. Fine, 'Immanence', *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 4 (Oxford 1986), pp.71－97.

Fine [1993]: G. Fine, *On Ideas* (Oxford 1993).

Gallop [1975]: D. Gallop, *Plato Phaedo* (Oxford 1975).

Pelletier & Schubert [1989]: J.F. Pelletier and L.K. Schubert, 'Mass Expressions', in D. Gabbay and F. Guenthner (eds.), *Handbook of Philosophical Logic* vol.4 (Kluwer Academic Publishers 1989), Chapter 4.

Peterson [1973]: S. Peterson, 'A Reasonable Self-Predication Premise for the Third Man Argument', in T. Irwin (ed.), *Classical Philosophy* vol. 4 (Garland 1995), pp.173－194. (From *Philosophical Review*, 82, 1973)

Quine [1960]: W.V. Quine, *Word and Object* (MIT Press 1960).

Vlastos [1954]: G. Vlastos, 'The Third Man Argument in the Parmenides', in R.E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, pp.231 － 263. (From *Philosophical Review*, 63, 1954)

Vlastos [1956]: G. Vlastos, 'Postscript to the Third Man: A Reply to Mr. Geach', in R.E. Allen (ed.), *Studies in Plato's Metaphysics*, pp.279－291.

Vlastos [1972]: G. Vlastos, 'The Unity of the Virtues in the Protagoras', in id., *Platonic Studies* 2nd.ed. (Princeton U.P. 1981), pp.221－265. (From

Review of Metaphysics, 25, 1972)
Vlastos [1974]: G. Vlastos, 'A Note on "Pauline Predication" in Plato', in id., *Platonic Studies* 2nd. ed., pp.404－409.

＊ 本稿の基本的なアイデアは 1998 年 11 月 18 日の研究会（名古屋大学哲学研究室）において口頭発表された。このとき批判や助言を頂いた方々に感謝したい。とりわけ哲学研究室の先生方には、その後もご指導や励ましを頂いた。この場を借りて感謝申し上げたい。